

# 共形変換と光錐の幾何学

adhara\_mathphys

2020 年 12 月 25 日

## 概要

本ノートでは Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{3,1}$  における共形変換と Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{4,2}$  中の光錐  $N^{4,2}$  上の幾何学の関係を解説する.

## 目次

1	導入	2
1.1	二つの時空	2
1.2	光錐	2
1.3	直交群	2
1.4	特殊直交群の回転行列表現	3
1.5	直交リー代数 $\mathfrak{so}(p, q)$ の導入	3
1.6	直交代数 $\mathfrak{so}(p, q)$ の微分演算子表現	4
1.7	共形変換リー代数 $\mathfrak{c}(3, 1)$	5
2	局所的な対応関係	6
3	空間の対応関係	7
4	大域的な対応関係	9
	付録	11
	参考文献	11

# 1 導入

## 1.1 二つの時空

本ノートにおいては二つの平坦時空が扱われる．空間成分を 3 つ，時間成分を 1 つ持つ Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{3,1}$  と空間成分を 4 つ，時間成分を 2 つ持つ Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{4,2}$  である．両時空における計量テンソルを  $\eta^{(3,1)}, \eta^{(4,2)}$  とする．すなわち，

$$\begin{aligned}\eta^{(3,1)} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix} \\ &= \text{diag}(1, 1, 1, -1)\end{aligned}\tag{1}$$

$$\begin{aligned}\eta^{(4,2)} &= \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix} \\ &= \text{diag}(1, 1, 1, 1, -1, -1)\end{aligned}\tag{2}$$

と定義する．また，両時空において  $|x|^2$  は

$$x^\mu x_\mu = \eta_{\mu\nu} x^\mu x^\nu$$

を表す<sup>\*1</sup>ものとし，これを  $x$  の Minkowski ノルムあるいは単にノルムという．

## 1.2 光錐

二つの Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{p,q}$  中で光錐 (light cone あるいは null cone) というものを定義する．すなわち，

$$N^{p,q} = \{x \in \mathbb{R}^{p,q} \mid |x|^2 = 0\}\tag{3}$$

を  $\mathbb{R}^{p,q}$  中の光錐と呼ぶ．

## 1.3 直交群

Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{p,q}$ , ( $pq \neq 0$ ) におけるノルムを保存する一次変換は群をなす．これを直交群  $O(p, q)$  という．すなわち，

$$O(p, q) = \{R \in GL(p+q, \mathbb{R}) \mid R^T \eta^{(p,q)} R = \eta^{(p,q)}\}\tag{4}$$

---

<sup>\*1</sup> このノートでは Einstein の縮約表記をしばしば用いる．

である。

また、 $O(p, q)$  のうち行列式が 1 になるもの全体は部分群をなす。これを特殊直交群  $SO(p, q)$  という。すなわち、

$$SO(p, q) = \{R \in O(p, q) | \det(R) = 1\} \quad (5)$$

である。

Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  において同様に定義される特殊直交群  $SO(n)$  特殊直交群が連結群であるのに対して、 $SO(p, q)$  は連結群ではない。恒等変換を含む連結成分を考えると、これは部分群をなし、狭義特殊直交群  $SO^+(p, q)$  と呼ばれる。

## 1.4 特殊直交群の回転行列表現

Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{p, q}$  上のベクトルに対する回転操作は計量テンソル  $\eta^{(p, q)}$  に関するノルムを保つ。すなわち、ベクトル  $x$  とその回転操作後のベクトル  $x'$  に対して、

$$|x|^2 = |x'|^2$$

が成立する必要がある。

Minkowski 空間のある正規直交基底  $\{e_1, e_2, \dots, e_{p+q}\}$  を用いて、ベクトル  $x$  を  $x = e_\nu x^\nu$  で表す。まず、 $1 \leq i, j \leq p, i \neq j$  あるいは  $p+1 \leq i, j \leq p+q, i \neq j$  とすれば、

$$\begin{aligned} R_{ij}(\theta)(x) &= x + e_i \{x^i(\cos \theta - 1) - x^j \sin \theta\} + e_j \{x^i \sin \theta + x^j(\cos \theta - 1)\} \\ &= x + e_i \{x_i(\cos \theta - 1) - x_j \sin \theta\} + e_j \{x_i \sin \theta + x_j(\cos \theta - 1)\} \end{aligned} \quad (6)$$

のように  $x^i x^j$  平面上の回転操作を定義できる。

計量の符号が異なる成分が関わる平面に関する回転は Lorentz boost (擬回転) と呼ばれる。 $1 \leq i \leq p, p+1 \leq j \leq q$  として、 $x^i x^j$  平面上の Lorentz boost は

$$\begin{aligned} R_{ij}(\theta)(x) &= x + e_i \{x^i(\cosh \theta - 1) + x^j \sinh \theta\} + e_j \{x^i \sinh \theta + x^j(\cosh \theta - 1)\} \\ &= x + e_i \{x_i(\cosh \theta - 1) - x_j \sinh \theta\} + e_j \{x_i \sinh \theta - x_j(\cosh \theta - 1)\} \end{aligned} \quad (7)$$

によって、 $x^j x^i$  平面上の Lorentz boost は

$$\begin{aligned} R_{ji}(\theta)(x) &= x + e_j \{x^j(\cosh \theta - 1) - x^i \sinh \theta\} + e_i \{-x^j \sinh \theta + x^i(\cosh \theta - 1)\} \\ &= x + e_j \{-x_j(\cosh \theta - 1) - x_i \sinh \theta\} + e_i \{x_j \sinh \theta + x_i(\cosh \theta - 1)\} \end{aligned} \quad (8)$$

によって、それぞれ定義される。

## 1.5 直交リ一代数 $\mathfrak{so}(p, q)$ の導入

次に  $i \neq j, 1 \leq i, j \leq p+q$  として、演算子  $L_{ij}$  を

$$L_{ij}x := \left. \frac{\partial R_{ij}(\theta)(x)}{\partial \theta} \right|_{\theta=0} = -x_j e_i + x_i e_j = -\eta_{jk} x^k e_i + \eta_{ik} x^k e_j \quad (9)$$

で定義する．特に  $L_{ij}$  は線形演算子となっている．このとき，

$$R_{ij}(\theta) = \exp(\theta L_{ij}) \quad (10)$$

となっている．基底  $\{e_i\}$  に関して行列表示すると，

$$L_{ij} = \eta_{ik}(E^k_j)^T - \eta_{jk}(E^k_i)^T \quad (11)$$

と書ける．但し， $E^i_j$  は  $(i, j)$  成分が 1 でそれ以外が 0 となっている  $p + q$  次元行列で， $T$  は転置を表す．

ここで交換子の計算

$$[(E^i_j)^T, (E^k_l)^T] = -\delta_j^k(E^i_l)^T + \delta_l^i(E^k_j)^T \quad (12)$$

を用いると，

$$\begin{aligned} [L_{ij}, L_{kl}] &= [(\eta_{i\mu}(E^\mu_j)^T - \eta_{j\mu}(E^\mu_i)^T), (\eta_{k\nu}(E^\nu_l)^T - \eta_{l\nu}(E^\nu_k)^T)] \\ &= \{\eta_{i\mu}\eta_{k\nu}(-\delta_j^\nu(E^\mu_l)^T + \delta_l^\mu(E^\nu_j)^T) + \eta_{i\mu}\eta_{l\nu}(-\delta_k^\mu(E^\nu_j)^T + \delta_j^\nu(E^\mu_k)^T) \\ &\quad + \eta_{j\mu}\eta_{k\nu}(-\delta_l^\mu(E^\nu_i)^T + \delta_i^\nu(E^\mu_l)^T) + \eta_{j\mu}\eta_{l\nu}(-\delta_i^\nu(E^\mu_k)^T + \delta_k^\mu(E^\nu_i)^T)\} \\ &= \{-\eta_{kj}\eta_{i\mu}(E^\mu_l)^T + \eta_{il}\eta_{k\nu}(E^\nu_j)^T - \eta_{ik}\eta_{l\nu}(E^\nu_j)^T + \eta_{lj}\eta_{i\mu}(E^\mu_k)^T \\ &\quad - \eta_{jl}\eta_{k\nu}(E^\nu_i)^T + \eta_{ki}\eta_{j\mu}(E^\mu_l)^T - \eta_{li}\eta_{j\mu}(E^\mu_k)^T + \eta_{jk}\eta_{l\nu}(E^\nu_i)^T\} \\ &= \eta_{ik}L_{jl} - \eta_{jk}L_{il} - \eta_{il}L_{jk} + \eta_{jl}L_{ik} \end{aligned} \quad (13)$$

となる．一方， $L_{ij}$  の線形結合で形成される行列の集合は線形空間であること，交換子はヤコビ律を満たすことから， $L_{ij}$  の線形結合で形成される行の集合は交換子をリー括弧とするリー代数である．これを  $\mathfrak{so}(p, q)$  と書き，直交リー代数と呼ぶ．

## 1.6 直交代数 $\mathfrak{so}(p, q)$ の微分演算子表現

直交代数  $\mathfrak{so}(p, q)$  の  $\mathbb{R}^{p, q}$  上関数空間上の微分演算子表現を得るためには，

$$L_{ij}x = -x_j e_i + x_i e_j$$

の右辺において，

$$e_i \rightarrow \frac{\partial}{\partial x_i}$$

の置き換えを行う．すなわち，

$$\begin{aligned} M_{ij} &= \eta_{i\mu}x^\mu \frac{\partial}{\partial x^j} - \eta_{j\mu}x^\mu \frac{\partial}{\partial x^i} \\ &= x_i \frac{\partial}{\partial x^j} - x_j \frac{\partial}{\partial x^i} \end{aligned} \quad (14)$$

を導入すると，

$$\begin{aligned} [\exp(\theta M_{ij})f](x) &= f(R_{ij}(\theta)(x)) \\ &= f(\exp(\theta L_{ij})(x)) \end{aligned} \quad (15)$$

となる。

交換子をリーブラケットとして  $M_{ij}$  たちの線形結合からなる線形空間はリー代数  $\mathfrak{so}(p, q)$  をなす。ここで、

$$[M_{ij}, M_{kl}] = -\eta_{ik}M_{jl} + \eta_{jk}M_{il} + \eta_{il}M_{jk} - \eta_{jl}M_{ik} \quad (16)$$

となっている。行列表現と微分演算子表現のリー代数同型は  $(L_{ij})^T$  と  $M_{ij}$  を同一視することによって確認できる。<sup>\*2</sup>すなわち、

$$(L_{ij})^T = \eta_{ik}E^k{}_j - \eta_{jk}E^k{}_i = E_{ij} - E_{ji} \quad (17)$$

$$[E^i{}_j, E^k{}_l] = \delta^k_j E^i{}_l - \delta^i_l E^k{}_j \quad (18)$$

を用いると、

$$\begin{aligned} [(L_{ij})^T, (L_{kl})^T] &= [(\eta_{i\mu}E^\mu{}_j - \eta_{j\mu}E^\mu{}_i), (\eta_{k\nu}E^\nu{}_l - \eta_{l\nu}E^\nu{}_k)] \\ &= \{\eta_{i\mu}\eta_{k\nu}(\delta^{\nu}_j E^\mu{}_l - \delta^{\mu}_l E^\nu{}_j) + \eta_{i\mu}\eta_{l\nu}(\delta^{\mu}_k E^\nu{}_j - \delta^{\nu}_j E^\mu{}_k) \\ &\quad + \eta_{j\mu}\eta_{k\nu}(\delta^{\mu}_l E^\nu{}_i - \delta^{\nu}_i E^\mu{}_l) + \eta_{j\mu}\eta_{l\nu}(\delta^{\nu}_i E^\mu{}_k - \delta^{\mu}_k E^\nu{}_i)\} \\ &= \{\eta_{kj}E_{il} - \eta_{il}E_{kj} + \eta_{ik}E_{lj} - \eta_{lj}E_{ik} + \eta_{jl}E_{ki} - \eta_{ki}E_{jl} + \eta_{li}E_{jk} - \eta_{jk}E_{li}\} \\ &= -\eta_{ik}(L_{jl})^T + \eta_{jk}(L_{il})^T + \eta_{il}(L_{jk})^T - \eta_{jl}(L_{ik})^T \end{aligned} \quad (19)$$

となっており、同型であることがわかる。

また、

$$[M_{\mu\nu}, x_\rho] = \left[ x_\mu \frac{\partial}{\partial x^\nu} - x_\nu \frac{\partial}{\partial x^\mu}, x^i \eta_{i\rho} \right] = -\eta_{\mu\rho}x_\nu + \eta_{\nu\rho}x_\mu \quad (20)$$

が成立することがわかる。

## 1.7 共形変換リー代数 $\mathfrak{c}(3, 1)$

$\mathbb{R}^{3,1}$  における回転演算子、並進演算子、伸長演算子および特殊共形演算子はリー代数をなすが、これは共形変換リー代数  $\mathfrak{c}(3, 1)$  と呼ばれる。すなわち、回転演算子  $M$ 、並進演算子  $P$ 、伸長演算子  $D$  および特殊共形演算子  $K$  の微分表現をそれぞれ

$$M_{\mu\nu} = x_\mu \frac{\partial}{\partial x^\nu} - x_\nu \frac{\partial}{\partial x^\mu} \quad (21)$$

$$P = \epsilon^\mu \frac{\partial}{\partial x^\mu} \quad (22)$$

$$D = x^\mu \frac{\partial}{\partial x^\mu} \quad (23)$$

$$K_\mu = (x^2 \delta^\nu{}_\mu - 2x^\nu x_\mu) \frac{\partial}{\partial x^\nu} \quad (24)$$

---

<sup>\*2</sup> 但し、添字  $T$  は行列の転置を表す。転置が出てくる理由は双対表現（反傾表現とも）というものを考えるとわかる。別のノートに記す予定。

とすると,

$$[M_{\mu\nu}, M_{\rho\sigma}] = -\eta_{\mu\rho}M_{\nu\sigma} + \eta_{\nu\rho}M_{\mu\sigma} + \eta_{\mu\sigma}M_{\nu\rho} - \eta_{\nu\sigma}M_{\mu\rho} \quad (25)$$

$$[D, M_{\mu\nu}] = 0 \quad (26)$$

$$[D, P_\mu] = -P_\mu \quad (27)$$

$$[M_{\mu\nu}, P_\rho] = -\eta_{\mu\rho}P_\nu + \eta_{\nu\rho}P_\mu \quad (28)$$

$$[D, K_\mu] = K_\mu \quad (29)$$

$$[K_\mu, K_\nu] = 0 \quad (30)$$

$$[K_\mu, P_\nu] = 2M_{\mu\nu} + 2\eta_{\mu\nu}D \quad (31)$$

$$[M_{\mu\nu}, K_\rho] = -\eta_{\mu\rho}K_\nu + \eta_{\nu\rho}K_\mu \quad (32)$$

となっている.

## 2 局所的な対応関係

本節では  $\mathbb{R}^{3,1}$  における共形変換リー代数に対応する  $\mathbb{R}^{4,2}$  で定義されるリー代数が存在することを示す.

共形変換代数  $\mathfrak{c}(3,1)$  はリー代数としては  $\mathfrak{so}(4,2)$  と同型であるが, それを見通しよくするために,  $1 \leq \mu, \nu \leq 4$  として,

$$M_{05} := -D \quad (33)$$

$$M_{\mu 5} := \frac{1}{2}(aK_\mu + a^{-1}P_\mu) \quad (34)$$

$$M_{\mu 0} := \frac{1}{2}(aK_\mu - a^{-1}P_\mu) \quad (35)$$

を導入する. 但し  $a \neq 0$  を定数とする. これを用いると,

$$M_{ij} \quad (0 \leq i, j \leq 5, i \neq j)$$

は共形変換代数の基底をなすことがわかる. この代数の次元は 15 であることがわかる. そして, 元の計量テンソルを拡張した新たな 6 次元の計量テンソル  $\eta$  を導入する.

$$\eta = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix} \quad (36)$$

$$= \text{diag}(1, 1, 1, 1, -1, -1) \quad (37)$$

正の符号をもつ第 0 成分と負の符号をもつ第 5 成分が新たに加わったことになる. この計量テンソルを用いると, 交換関係は

$$[M_{ij}, M_{kl}] = -\eta_{ik}M_{jl} + \eta_{jk}M_{il} + \eta_{il}M_{jk} - \eta_{jl}M_{ik} \quad (38)$$

のように統一的に書かれることがわかる．すなわち共形変換代数  $\mathfrak{c}(3, 1)$  がリー代数としては  $\mathfrak{so}(4, 2)$  と同型であることが明確となった．つまり群としては局所同型の関係にある．

### 3 空間の対応関係

本節では Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{3,1}$  と Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{4,2}$  中の光錐  $N^{4,2}$  の対応関係について説明する．ここで  $N_0^{4,2}$  を  $N^{4,2}$  の中で

$$\begin{pmatrix} -t \\ x \\ t \end{pmatrix}, t \in \mathbb{R}, x \in \mathbb{R}^{3,1}$$

の形のものを除いた集合であるとする．

$N^{4,2}$  に属するが  $N_0^{4,2}$  には属さない点

$$\begin{pmatrix} -t \\ x \\ t \end{pmatrix} \quad (39)$$

に対して、 $|x|^2 = 0$  である必要がある．

$N_0^{4,2}$  の要素は

$$\begin{pmatrix} \lambda \frac{1-|x|^2}{2} \\ \lambda x \\ \lambda \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix}, x \in \mathbb{R}^{3,1}$$

と書ける．但し  $\lambda \neq 0$  である．

ここで

$$\pi : N_0^{4,2} \rightarrow \mathbb{R}^{3,1} : \begin{pmatrix} \lambda \frac{1-|x|^2}{2} \\ \lambda x \\ \lambda \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} \mapsto x \quad (40)$$

という全射  $\pi$  を考える．

$x$  を固定したときに

$$\left\{ \begin{pmatrix} \lambda \frac{1-|x|^2}{2} \\ \lambda x \\ \lambda \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} \middle| \lambda \in \mathbb{R} \right\}$$

を一点とみなすことで  $N_0^{4,2}$  の射影空間  $PN_0^{4,2}$  を考えることができる．すると、全単射

$$\pi_0 : PN_0^{4,2} \rightarrow \mathbb{R}^{3,1} : \left\{ \begin{pmatrix} \lambda \frac{1-|x|^2}{2} \\ \lambda x \\ \lambda \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} \middle| \lambda \in \mathbb{R} \right\} \mapsto x \quad (41)$$

が誘導される．

$\pi_0$  の定義域を

$$\left\{ \lambda \begin{pmatrix} -t \\ x \\ t \end{pmatrix} \mid \lambda \in \mathbb{R} \right\} \quad (42)$$

の形の点を含むように, すなわち  $PN^{4,2}$  全体に拡張したい. 拡張した写像を  $\tilde{\pi}_0$  と書くことにする.

## 反転変換

反転変換はノルムが 0 ではない領域,  $\mathbb{R}^{3,1} \setminus N^{3,1}$  においては全単射写像として定義されている. すなわち,

$$I : \mathbb{R}^{3,1} \setminus N^{3,1} \rightarrow \mathbb{R}^{3,1} \setminus N^{3,1} : x \mapsto \frac{x}{|x|^2} \quad (43)$$

である. しかも,  $I^2 = 1$  という性質を持つ.

“inverted cone”  $\tilde{N}^{3,1}$  <sup>\*3</sup> というものを導入する. 各  $x \in N^{3,1}$  に対して,  $I$  の行き先を用意するのである.

反転変換により  $\mathbb{R}^{3,1} \setminus N^{3,1}$  の場合は

$$|I(x)|^2 = \left| \frac{x}{|x|^2} \right|^2 = \frac{|x|^2}{(|x|^2)^2} = \frac{1}{|x|^2} \quad (44)$$

のようになっているが,  $N^{3,1}$  の場合は  $|I(x)|^2 = \infty$  と解釈する. すなわち,  $x \in \tilde{N}^{3,1}$  の時,  $|x|^2 = \infty$  と解釈する.

## 伸長演算子と反転演算子の関係

$x \in \tilde{N}^{3,1}$  を加えるだけで十分であろうか. Cordani[2] の p.114 には, “... Thus, a transformation of  $\mathcal{K}$  <sup>\*4</sup> always blow up at some point of  $M_0$  <sup>\*5</sup>. It is possible to regularize this action by adding a null cone to  $M_0$  (since this is the topology of the submanifold, where the action  $\mathcal{K}$  blows up) at infinity. ” とあるので,  $x \in \tilde{N}^{3,1}$  を加えるだけで十分であると解釈できる.

しかしながら, 実はそれでは不十分である. ここからはそのことについて示す.

## 特殊共形変換演算子

特殊共形変換演算子は  $K(t) = IP(t)I$  で定義される演算子である.

$|x|^2 \neq 0$  かつ  $1 + 2t^\mu x_\mu + |t|^2 |x|^2 \neq 0$  であれば,

$$\begin{aligned} K(t)(x) &= IP(t)I(x) \\ &= \frac{x + |x|^2 t}{1 + 2t^\mu x_\mu + |t|^2 |x|^2} \end{aligned} \quad (45)$$

---

<sup>\*3</sup> 著者 adhara\_mathphys の造語

<sup>\*4</sup> adhara 注: 特殊共形変換のこと

<sup>\*5</sup> adhara 注: Minkowski 空間  $\mathbb{R}^{3,1}$  のこと



となっている.

$\lambda \neq 0, |x|^2 = 0$  の時,

$$\pi : \begin{pmatrix} -\lambda \\ \lambda x \\ \lambda \end{pmatrix} \mapsto I(x) \quad (46)$$

と定義する.

あとは

$$\begin{pmatrix} 0 \\ x \\ 0 \end{pmatrix} \quad (47)$$

をどう解釈するか.

## 4 大域的な対応関係

本節では  $\mathbb{R}^{3,1}$  における共形変換が対応する  $\mathbb{R}^{4,2}$  の光錐  $N^{4,2}$  上における回転操作に対応することを示す.

まず,  $SO(4,2)$  はノルムを保つので  $M^{4,2}$  に作用できることを指摘しておく.

$a = 1$  すなわち,

$$M_{05} := -D \quad (48)$$

$$M_{\mu 5} := \frac{1}{2}(K_\mu + P_\mu) \quad (49)$$

$$M_{\mu 0} := \frac{1}{2}(K_\mu - P_\mu) \quad (50)$$

とする.

$M_{ij} \rightarrow L_{ij}$  の置き換えをする.

$$L_{ij} = \eta_{ik}(E^k{}_j)^T - \eta_{jk}(E^k{}_i)^T \quad (51)$$

$$L_{05} = (E^0{}_5)^T + (E^5{}_0)^T \quad (52)$$

$$L_{15} = (E^1{}_5)^T + (E^5{}_1)^T \quad (53)$$

$$L_{10} = (E^1{}_0)^T - (E^0{}_1)^T \quad (54)$$

$$L_{12} = (E^1{}_2)^T - (E^2{}_1)^T \quad (55)$$

$$D = -M_{05} \rightarrow -L_{05} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (56)$$

$$D(t) = \exp(t(-L_{05})) = \begin{pmatrix} \cosh(-t) & 0 & 0 & 0 & 0 & \sinh(-t) \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ \sinh(-t) & 0 & 0 & 0 & 0 & \cosh(-t) \end{pmatrix} \quad (57)$$

$$D(t) \begin{pmatrix} \frac{1-|x|^2}{2} \\ x \\ \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{e^{-t}-|x|^2 e^t}{2} \\ x \\ \frac{e^{-t}+|x|^2 e^t}{2} \end{pmatrix} = e^{-t} \begin{pmatrix} \frac{1-|e^t x|^2}{2} \\ e^t x \\ \frac{1+|e^t x|^2}{2} \end{pmatrix} \quad (58)$$

より, 確かに  $D(t)(x) = e^t x$  となっている.

並進

$$P_1 = M_{15} - M_{10} \rightarrow L_{15} - L_{10} = \begin{pmatrix} 0 & -1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (59)$$

$$P(te_1) = \exp(t(L_{15} - L_{10})) = \begin{pmatrix} 1 - \frac{t^2}{2} & -t & 0 & 0 & 0 & -\frac{t^2}{2} \\ t & 1 & 0 & 0 & 0 & t \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ \frac{t^2}{2} & t & 0 & 0 & 0 & 1 + \frac{t^2}{2} \end{pmatrix} \quad (60)$$

$$P(te_1) \begin{pmatrix} \frac{1-|x|^2}{2} \\ x \\ \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1-|x+te_1|^2}{2} \\ x + te_1 \\ \frac{1+|x+te_1|^2}{2} \end{pmatrix} \quad (61)$$

より,  $P(te_1)x = x + te_1$  となっている.

$$K_1 = M_{15} + M_{10} \rightarrow L_{15} + L_{10} = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (62)$$

$$K(te_1) = \exp(t(L_{15} + L_{10})) = \begin{pmatrix} 1 - \frac{t^2}{2} & t & 0 & 0 & 0 & \frac{t^2}{2} \\ -t & 1 & 0 & 0 & 0 & t \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ -\frac{t^2}{2} & t & 0 & 0 & 0 & 1 + \frac{t^2}{2} \end{pmatrix} \quad (63)$$

$$K(te_1) \begin{pmatrix} \frac{1-|x|^2}{2} \\ x \\ \frac{1+|x|^2}{2} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{1-|x|^2+2tx^1+t^2|x|^2}{2} \\ x+t|x|^2e_1 \\ \frac{1+|x|^2+2tx^1+t^2|x|^2}{2} \end{pmatrix} = (1+2tx^1+t^2|x|^2) \begin{pmatrix} 1-\left|\frac{x+t|x|^2e_1}{1+2tx^1+t^2|x|^2}\right|^2 \\ \frac{2}{1+2tx^1+t^2|x|^2} \frac{x+t|x|^2e_1}{1+2tx^1+t^2|x|^2} \\ 1+\left|\frac{x+t|x|^2e_1}{1+2tx^1+t^2|x|^2}\right|^2 \end{pmatrix} \quad (64)$$

より,  $K(te_1)x = \frac{x+t|x|^2e_1}{1+2tx^1+t^2|x|^2}$  となっている.

$$M_{12} \rightarrow L_{12} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \quad (65)$$

$$R_{12}(t) = \exp(tL_{12}) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \cos t & -\sin t & 0 & 0 & 0 \\ 0 & \sin t & \cos t & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \quad (66)$$

## 付録

## 参考文献

- [1] Ronald Mirman. (2005). “Quantum Field Theory Conformal Group Theory Conformal Field Theory.” iUniverse.
- [2] Bruno Cordani. (2012). “The Kepler problem: group theoretical aspects, regularization and quantization, with application to the study of perturbations (Vol. 29).” Birkhäuser.